



女子大生 興国論

いまどきの女子大生は、
「もうかる」「おもしろい」「エエカッコができる」という
3つのモチベーションによって行動する。
人生を楽しく送る才能にかけては、だれにも負けない彼女たち。
その感性は、日本の明るい未来を切り開く起爆剤になるかもしれない。
この10年間の学生の変化をつぶさに見てきた、
武庫川女子大・高田公理教授が説く「女子大生興国論」。

高田 公理 武庫川女子大学 情報メディア学科教授

女子大教員としての 22年間から

わたしが女子大の教員になったのは1982年。以来、22年が経ちました。この間、日本経済は高度成長のピクを過ぎ、下り坂に向かい始めました。当然それは大きな社会変化をもたらしました。

しかし、大学の中だけを見てみると、毎年3月に卒業生が出ていき、4月には新入生が入ってくる。その繰り返しです。から、わたしに学生たちの変化を明快にとらせることはできません。強いて言えば、80年代前半の女子大生は必ず卒業式で涙を流した。それが80年代後半以降、泣かなくなつた。彼女たちにとって、大学の意味」といふか、重みが変化したのかもしれない。

武庫川女子大学には、新しい学科の創設メンバーとして92年に赴任しました。時代の変化に対応して、新学科をつくることになつたわけです。その新学科に最初の学生が入学したのは94年です。ですから、第6回の卒業生を送り出した昨年、ちょうど10年分の新入生と出会うたことになりました。

そんな学生たちとつきあっていると、彼女たちが、わたし自身の学生時代とは、それほど異なつた思いや考えを持っているらしい。

い、そんな気がすることは確かです。

社会における「大学」の 位置変化

わたし自身の大学時代、すなわち60年代前半の大学進学率は35%程度でした。女性に限ると、その率はずっと低かつたはず。つまり、大学進学者のほうが少数派でした。

それに対して、現在の大学進学率は49%にのぼっています（平成15年度学校基本調査）。男女間の差もほとんどありません。つまり、ほぼ半数の人が大学に進学している。その結果、大学という場の意味が変化したとしても不思議はありません。

たとえば、わたしたちの大学生時代には、タバコは吸うし、大酒を飲んで乱暴狼藉を働く。そうかと思うと、政府を打倒する政治活動に入れ込んだりする。いまから思えば、ほんの若造に過ぎなかつたのに、「大人になつた」という幻想からなかつた、ずいぶん偉そうに、世の中を小馬鹿にしていたようなところがありました。

それに比べると、いまわたしの周囲にいる大学生たちには、そんな思いあがつた幻想が感じられません。現に、大学にはPTAと同様の役割を果たす保護者会のようなものがあり、学生の成績はすべて両親

宛てに送られます。どうも、そのほうが学生も親も安心できるようなのですね。

むろんこれに関しては、わたしの勤務先が女子大だという事情があるのかもしれませんが、しかし、わたしの目から見て、現在の大学は、高度成長期における高等学校に近い位置を占めている。そんなことが、最近の大学の側の対応にも、影響し始めているようです。

たとえば、理系を中心に大学を6年制にしようという動きがあります。実際、医学部は以前から6年制を採用してきました。一定以上の専門的な知識や技術が身につけていないと、使いものにならないからでしょう。それに加えて、近々、薬学部も6年制になるようです。大学を6年制にしないで、建築をはじめ理系では大学院の修士課程を終了するのが当然という風潮が強まっています。

一方、18歳人口は減少の一途をたどり、大学進学率は一貫した上昇基調にあります。こうした状況下で、大学が、後期中等教育「のような位置を占めるのは当然の帰結なのかもしれませんが、さらにはかのほれば、戦前の世代に比べての中学校と同じような位置を占めているのだと思います。つまり、戦前の旧制中学校、戦後も団塊の世代「くらいまでの高校、そして現在の大学低学年は、それぞれの時代に社会



に占める位置や役割が、よく似ているというわけです。それにもなると、学生の意識や行動も変わってくる。大学生の姿と位置づけは、流動的に考えるべきだと思います。

「OS」とデータベース

現代の学生の意識における大学は、一種の「就職予備校」なのかもしれません。正論からすれば、「大学とは学問をする場」なのでしょう。でも、そういう意識は、どうも薄れているようです。

たとえば、わたし自身は大学に、学生として5年間、在籍していました。しかしその間、果たして講義に10回も出たかどうか。つまり、講義以外のところまで、うろつろつしていたわけです。

うになつていきます。それと同様、大学での勉強も、いろんなことを学び、知識として蓄積していく。しかし同時に、それらの知識を、自分自身の中で、OSのような役割を果たしているなにか「を、バージョン・アップするために活用する。実はこのことが大切なのです。昔の大学の「勉強」は、むしろそうした点に、主たる目標があつたような気がします。

ところが、いまの学生は、子どもの頃からテレビなどを通して、大人とまったく変わらない情報環境の中にいます。言い換えれば、大人の世界をのぞきながら育つ。そのため、大学に入学する時点で、わたし自身の学生時代よりも、ずっと大量の情報を集積したデータベースを身につけている。もっとも、それらの情報は、断片化「されているので、現実には使いようがないわけですが、..

その一方で、彼らのOSは、どうなっているのか。その目的は、小・中・高等学校とも、ひたすら入試問題を要領よく解く。そのため、知識や情報を、手際よく処理する。それによって、個々の生徒の偏差値を高める。そうしたことを、目的として訓練するわけです。このOSは、ある意味で非常に完成度が高い。だから、大学に入学しても、同じOSを使えばいいのだというふうになるのでしょ。



その結果どういったことになるか。彼らは高校までと同じOSを使って、大学の講義や書物を通して手に入れた知識や情報を、ひたすら自分の脳内のデータベースに蓄積していく。ただし、そのためのメモリーは、一種のキャッシュ・メモリーのようなものらしい。定期試験が終わると、すべて揮発してしまふ。どうも、そういうことになっているように、わたしには思えるのです。

「いつか勉強の仕方ではOSそのものがバージョン・アップすることはありえない。そのため、つねに変化し続けている現実の社会に適応して、問題を解決する能力を高める能力が育たない。」このあたりに現代の大学教育の抱えている大きな問題があるように思います。

「OS」のバージョン・アップ

なにかを「学ぶ」のは、もとより知識の蓄積を増やすためです。でも、その目的は、自分が生きていく上で出会う問題を解決するための、いわば「OSのバージョン・アップ」にあるはず。

ところが、すでに見たように、大学進学をめざす生徒たちのOSは、偏差値を上げる「という目的に最適な役割を果たす

ように構築されている。しかも、その完成度が高い。となると、「これらを一度破壊し、新たに」応用の利くOSに再編成しなければならぬ。このことを、大学教育は最重要課題にすべきだと、わたしなどは考えているわけです。

なぜなら、学生の多くは、自分を活かせる会社に就職したい」と思っている。その相手の企業は、その学生のOSがビジネスの役に立つかどうかを見定めるために試験をするわけでしょう。決して記憶として蓄積した情報のデータベースの多寡を調べるわけではない。大事なのは、応用の利く「OS」なのです。

でも世の中、うまくしたもので、あまり心配する必要はないのかもしれない。3年生ぐらいの学生が、就職説明会に足を運び、就職試験の面接を受けると、瞬間に「このOSに気がつくのですから」。実際、そういう経験をした途端に、まず、曲がりなりにも「敬語」が使えるようになる。同時に、自分自身のOSをバージョン・アップする必要性に気づきます。

むしろそれ以前ゼミでの教師や友人とのやりとりの中で、そのための準備は進んでいる。あるいは卒業論文の執筆をめざして、自ら課題を見つけ、仮説を立てて、それなりに研究に着手してもいる。しかし、表だって「OSのバージョン・アップが必要

だ」という問題意識は、就職活動を境にして出てくるように思います。そのとき彼女たちのうちの3分の1ぐらいは、データベースに蓄積してきた知識を、より有機的にOSのバージョン・アップにつなげようと考え始めるわけです。

現代学生を動かす3つの要因

いまひとつ、少し前までの学生と現在の学生との違いを指摘すると、「脅迫が意味を持つかが」という点にあるように思います。

つい最近まで「医療、生命保険、教育は「3大脅迫産業」として商売ができた。「医者、のい」ことを聞かないと早死にしますよ」「生命保険に入っておかないと老後が大変ですよ」と。

ところが、そのいずれもが、いわば「楽屋落ち」してしまった。下手に医者の言いつまみにしていると殺されかねない。生命保険も、契約通りの保険金が支払われるかどうか分からない。教育も同じことです。最高学府の卒業生の少なからざる部分が、晩年を迎えて、手が後ろにまわったり、人前で土下座したり……。きちんとした教育を受けておけば将来が安定するのかがどうかが判然としない。そんな時代に、脅迫で

学生を勉強させることはできません。

ではどうするか。現代の学生を、勉強をはじめ、何かをさせるために動機づける要因は「つしかなないような気がします。すなわち、」 お金もつかる」「 おもしろい」「 エキカッ」ができる」「 しかも、3番目の「エキカッ」には、学業成績が良い」といつのは入らない。彼らの「エキカッ」はそれ以外の「つしかな」にあるようにです。

それはいいとして、「つしかな」条件を満たす世界が身近にありますね。「芸能界」です。むろん現代の学生がすべて「芸能界」をめざしているわけではありません。しかし、これら3条件を満たしてくれる世界への関心は非常に強い、と言ってよろしい。

お客を相手にオシャレなサービスを提供するカフェの経営「お客」に言はれる旅の企画を立てたり接客をする「つしかな」さまざまなイベントの企画立案や実施…。加えて彼女らが「つしかな」を持っているのはテレビの世界でしょうか。

たとえば平成15年度の前半、わたしのゼミでは、「いきなりTVディレクター」という学生が作った24分15秒の番組を放映してくれるテレビ大阪の企画に応募したのですが、学生たちは大喜びで、懸命に勉強しましたね。

「関西人パワーの秘密」というタイトルの番組で、中身は「益体もない」阪神タイ

ガースを応援している元気な人々の、あかけなのですが、6月と7月はビデオカメラをかつぎながら、授業の合間を縫って取材のために阪神間の各地を走り回っていたものです。

テレビ番組の制作実習から学ぶ

そんなことがどんな勉強になるのか。テレビ番組を作るには、まず「企画書」を書かなければなりません。そのためにはさまざまな情報を集める必要がある。次いで「ブレインストーミング」をして、プロトを固めなければならぬ。メンバーは10人でしたが、そのチーム「ブレ」を効率的に進める組織管理の仕事も出てくる。それに、実際の取材では「きちんとした敬語を使わないと、だれも相手にしてくれない。そして最後の編集の段階では、辛抱強さと根気と集中力が求められる。

これだけのことができる、とだいたい就職試験に臨む準備の相当部分が整ったこととなります。最初に作業を始めた頃は、うちの明かない「つしかな」したおしゃべりが続きました。でも、足で稼ぎ、手を動かしているうちに、ゆるやかな彼女らのネットワークの中で、それぞれの役割分担が決まっていく。むろん、わたしも要所で

アドバイスをしたり、阪神フリーグの大学教授を紹介したりはしました。でも、それ以外は「野放し」。まあ、「野」となる、仕事の領域」の整備だけは責任上、わたし自身がやりましたが…。

その結果、彼女らは、税込み30万円也」の制作費を稼ぐこともできたわけです。

「お金の価値」と「時間の価値」

この制作費30万円が、彼女らの成長に大きな役割を果たす。というのも、将来のために勉強しなさい」という物言い「がほとんど有効性を発揮しないのですから…。とりあえず、「いまお金になること」、次いで「おもしろい」「エキカッ」ができる「つしかな」の「つしかな」を体験することで、将来のことが考えられるようになる。その「つしかな」ことではないかと思えます。

いまひとつ、彼女らの金銭感覚が興味深い。その前に思い出すべきは、既存の経済学です。それは、まず人間を、ホモ・エコノミクス」として、学問体系を構築します。簡単に言うと、「人は効用を最大にするために行動する」「お金＝マネーこそ最も普遍的な価値の媒体だ」という仮説が、その背景にあります。

でも、彼女たちの経済行動は、その単純じゃない。まず彼女らは、「自分がアルバイトで稼いだお金」両親から小遣いとしてもらったお金「おしちゃん・おばあちゃん」くれた小遣い「いずれも、価値の媒体としては等価」であるはずなのですが、それぞれに消費の用途が違いますから…。お金の入手方法で、使い道が変わる。経済学者は考えたこともないはず。しかも、彼女らの好きなブランド物の商



HRIグループインタビュー(武庫川女子大高田ゼミより)

品ですか？そういうものをイメージすると「効用を最大にするために金銭を消費している」などは、まるで考えられない。彼女らの金銭消費は、非合理そのもの。だと言わざるをえない局面に満ちています。

だから、前提が間違っている経済学者の経済予測が、みなはずれるのです。

実際、あるとき彼女らの「お小遣い調査」をしたのですが、最高月額が15万円、最低月額が2万円くらいでした。でも彼女らの生活の程度は、これほどの金銭格差があるとは到底思えないくらいに「均質化」している。つまり「マネー」は普遍的な価値の媒体」としての機能を發揮していないというほかないわけです。だから、彼女らの経済生活を詳細に眺めると、新しい経済学が誕生する可能性がある、わたしは考えています。

ところで、近代の資本制社会には「タイム・イズ・マネー（時は金なり）」という考え方がありました。しかし、こうした価値観も揺らいでいるのではないが。

実に彼女たちは時間貧乏だというほかありません。ゼミなどで、飲み会の約束でもしよつものなら、彼女らは一斉に手帳を出す。きちぎちにスケジュールが詰まっているのです。それも、大学の授業に係のないアルバイトや友人とのアポイントやら...

まあ、大学の授業の優先順位は、当然それら以下。このことは、彼女らの情報の発信者に対する信頼度がテレビの出演者、友人や知人、インターネットのホームページの発信者、そしてようやく大学の教師といった順に低下していくことを思えば、当然の話でもあるのですが。

いずれにしても、そういうわけで、なかなか全員の予定が合わない。つまり彼女らはスケジュールを埋めることから、ある種の充実感を受け取っている。しかし思えない。そこでは「タイム・イズ・セルフ・パフォーマンス」、お金よりもなにかおもしろいことを体験したい」という欲求が表出されているようにも思えます。

そこで思い出すと、わたしの学生時代には、スケジュール表を中心とした手帳を持つことなど、なかったのではないが。世代ごとの生活感覚の違いは、こんな点にもあるようです。

大学という場の「価値転換」を

そういう学生たちが、大学で4年間を過ごしたあと、さまざまな企業に就職していきます。その際、わたしが学科長を務めている情報メディア学科では、ゼミの指導教授が、学生の就職の面倒をみる必要

はほとんどありません。

にもかかわらず、いや、そうではなくて逆に、教員が関与しないがゆえに「なのでしょつか、学生の就職率は95%以上。みんなそれぞれに自分で納得できる就職先を探してきます。その際、就職先の選択基準にも先の3要素すなわち、お金がもうかる」「おもしろい」「エキスツ」ができる」といったあたりが挙げられそうです。

ただ、就職試験では、共学の大学に比べ、女子大の学生は、割り食った」という感じを持つようです。いまなお企業の多くは意味もなく、「共学の大学」への信仰を捨てられないようです。

でも、そういう難関を突破して、学生たちは内定を取ってくる。彼女らが就職率95%以上を実現してくれているわけですが、そういう彼女らを、わたしたちは自信を持って社会に送り出しています。

ではなぜ、彼女らが就職試験に強いのか。彼女らの現実感覚が強靱だということが第一の要因でしょう。でも、それを育てることのできる要因の一つに、わたしの所属する学科の教員の半ばが大学育ち、半ばが民間企業育ちというパフンスの良さが作用しているのかも知れません。

つまり、大学育ち、民間企業育ちの教員には、それぞれの良さがあります。それらが良い意味で牽制しながら融合したとこ

ろに、「学生たちには、大学の4年間を楽しく好きなように過ごしてもらおう」という合意が成立するわけです。

だから、入学試験でも、高校での学業成績を過剰に重視するという偏りから自由でいられる。とくに、いわゆるAO入試では、こうした傾向が顕著になる。現にここ数年、全国レベルの放送コンテストの上位入賞者、日本舞踊の名取り、高校のホームページ制作者など、多様な能力の持ち主



が、AO入試で入学してきています。

こんな話をする」と、学力水準は維持できているのか」と質問する人もいます。大丈夫です。いまどきの大学は、日本語が読めて書ける」という能力がある水準をクリアしていれば、十分学べるというように条件を修正する必要があると思います。それさえあればあとはさまざまなおもしろがれる若者」を集めること

「このことが一番大切なのですから……」。かえって高校時代に、大学入試のために、精も根も尽き果てた若者が多数を占めることのほうが大変です。つまり、「偏差値を上げる」というつまらないことに精力を使わずに、余力を持って大学に進学してきた若者。その可能性を自ら大学で伸ばし、何事かをおもしろがりながら世の中に出ていく学生を育てることがこれからの大学がめざすべきところなのではないでしょうか。

「亡国」を超えて「興国」へ

これまでの話は、わたし自身が勤務する女子大学と、そこで出会う女子大生から得た思いを記したに過ぎません。それでは、現代日本の女子大生と大学にかかわる話としては不十分なのではないか。当然そんな疑問が出てくるでしょう。しかし、こ

れまでに述べたところにも、武庫川女子大学を超えた普遍性が含まれています。

確かに、現代の日本には、ひたすら高度な学問研究をめざす大学院中心の大学が、ごく少数あります。しかし、それ以外の大半の大学は4年間の修学のうち、現実の社会に出て活躍する人材を育てている。こうした大学の多くに、これまでの話ばかりあてはまるはずは、ありません。

いまひとつ、これまでの話の中心は、女子大学と女子大生でした。その点では、やや特殊な議論を展開することになったかもしれません。

しかし、高校まで偏差値輪切り教育によつて切り刻まれ、同時に将来への不安にさいなまれていた男子学生に比べると、言葉は良くありませんが、ずいとお気楽な「女子大生は、人が楽しく人生を送るのに、なにが大切か」に関して、はるかに感度が高い。彼女らの自由な思いや振る舞い、おもしろいことへのこだわり、「エガツ」への感受性、そして、まずは「自分の楽しさ」を大切に、健全な自己中心主義。そういった彼女らの資質こそが、高度経済成長のあとの21世紀日本に、明るい未来を切り開く上で大きな役割を果たす。わたしは、そう考えています。

そういえば、わたし自身が学生だった1960年代前半、暉峻康隆氏が女子

大生「亡国論」を世に問い、物議を醸しました。以来40余年、日本は亡国の危機に瀕しているのか、それとも興国の過程にあるのか。

そこで気づくのは、現代の日本が、世にも珍しい「富国・貧民社会」ということです。確かに一方で、日本は多額の外貨を貯め込んだ世界に冠たる「富国」です。あり余る社会」だといつてもよさしい。

しかし人々は、あくせく働き、それでも将来には不安の雲が立ちこめています。普段の生活を楽しむこともままならない。それは「貧民」の生活だといつてもよさしい。むろん、物質的には豊かである。しかし、豊かさの実感」がない。といつか、あまりにも「楽しみ」が少ないように思います。

それだけじゃない。馬鹿な政府が、日本の誇る平和憲法を蹂躪して、イラクに軍隊を派遣してしまつた。それは、1930年以降、泥沼の戦争に足を踏み入れていた戦前の日本と同じ軍事大国として、亡国をめざす道への第一歩だといつてもよさしい。

こうした状況のもとで、わたしたち、普通の日本人がめざしたいのは、「豊かさの追求」を少しずらして、「楽しみの追求」に目を向けることなのではないか。そのことによつてのみ、新しい生活のイメージが展望できるのではないか。

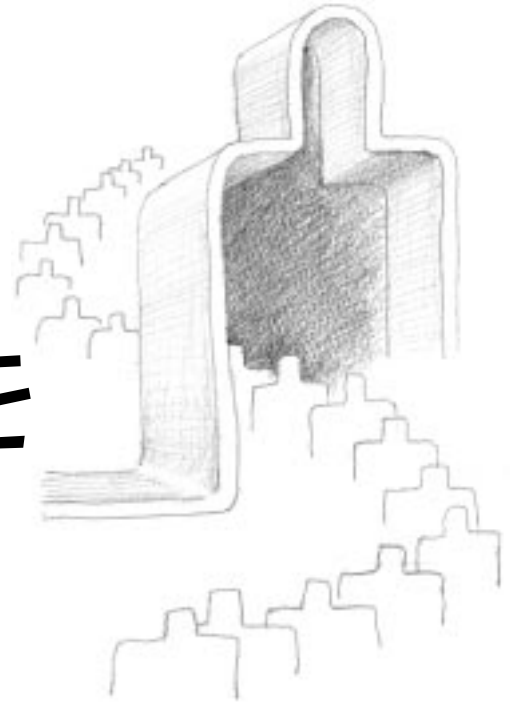
そんな方向をめざすのなら、その先導者こそ、現代日本の女子大生でしょう。と、りあえずの「楽しみ」をもたらしてくれる「お金もつけ」と「おもしろさ」と「エガツ」を、少しも悪びれることなく求め続ける。そういった平和な人々。彼女らこそ、国家などという幻想を意識にのぼらせることさえなく、結果として「興国の民」となる資質を秘めた存在なのではないか。そんな思いを持って、わたしはこの小論を閉じたいと思います。



たかだ まさとし

1944年京都府生まれ。1968年京都大学理学部卒。現在、武庫川女子大学生活環境学部情報メディア学科教授。専門は、情報文明学、観光文明学、都市文化論。現在の研究テーマは「情報文明社会の旅と人生 地球をフィールドとして」。著書に『なぜ「タダの水」が売れるのか』、『酒場の社会学』、『自動車と人間の百年史』、『都市を遊ぶ』など。

楽しい 「仕事の学校」を つくろう



仕事観がない、すぐ辞める。
さんざんこき下ろされて、採用されるのは理工系大学院生だけ。
これじゃあ、学生だっておもしろくない。
学生が自律して仕事や会社と出会う機会があれば、
もっと仕事はおもしろいとわかるはず。
なんとかつくれないだろうか、楽しい「仕事の学校」。

柴原 義章 株式会社インターコミュニティ 代表取締役

現場は逆。リミット

「最近の営業は難しいです。」
そこ「ほすのはど」にでもいる営業マンAだ。
「お客様の要望は、その場ですぐに決めてこい。情報がなければ、ケータいで社内ネットワークにアクセスしろ。わからないことはわかる者に聞け。持ち帰ってはいけない」と言われるんです。

これまでの日本企業においては、本社やトップが課題を設定し、解決策を考え、現場はそれに従うというのが普通の意思決定の流れだった。変化が速いからいまは逆営業マンAのように、最前線の人とその場で起こっている事象から即座に問題を発見し、解決策を考え、行動することが求められている。お客さまに近い社員の自律が問われるようになってきたのだ。その代わりに、本社スタッフや上司は、最前線の彼らを支援する役目になった。この変化は経営システム全体の課題であって、決して個人の問題ではない。しかし、末端営業マンの働き方は変わらざるを得ない。
「ソリューション。自律。価値創造……。そんな言葉を毎日毎日聞いて、ウルセーって感じです。会社の会議や経営書やいろんなメールトークや教育研修の現場でガンガン言われています。」

現場に権限を持たせる。それを最も徹底している会社の一つがセブンイレブンの「ジャパ」である。同社は自らを「変化対応業」と呼んでいる。メインプレイヤーは全国1万店のセブンイレブンのオーナーに対して店舗指導をするOFC（オペレーション・フィールド・カウンセラー）。最前線のOFCはみな若い。それぞれいくつかのフランチャイズを担当し、消費の傾向や時代の変化、環境の変化、そしてお客様の変化から仮説をつくり、フランチャイズのオーナーに提案し、仮説を検証するという作業を毎日行っている。しかも一人の力でたかが知れているので、全国のOFCが週1回集まり情報を共有し、異なった意見や専門知識を持つ人を巻き込んで問題を解決していく。同社では、このOFCを全社挙げて支援する体制をとっている。最前線のOFCこそ企業価値を左右するといふ考えで、経営システムが機能しているわけだ。この結果、OFCは自ら行動し価値をつくり出す仕事のしかたが自然とできるようになっている。

最前線の社員が企業を動かすという変化は、若い社員の採用や求める人材のイメージも変える。セブンイレブンの採用担当者と言った。「わたしたちが大切にしていることは人を動かす力です。知識だけでは人は動き

ません。お客様が喜ぶことが自分のシアワセと感じられるか。それにつながる経験をしているか。それを自分の言葉で語ることができるか。そして、仕事で失敗してもそれはキャリアだと思って再び挑戦しようと思える動機があるか？ そいつのことを重視しています。大学名は一切聞きません。高校卒と大学卒すら区別していません」

だからかどうかわからないが、銀行が欲しいが、一流ブランド校出身者は、セブン・イレブン・ジャパンには少ない。しかし入社3年目くらいになると、社員はすごく力をつける。とりわけマネジメント能力に関しては相当なものになる。

あるエネルギー会社の担当者も同じようなことを言う。

「このいつ時代だから新しい挑戦を続けることがとても大切です。そのためには自分が苦労してもやってみようという仕事への共感がないと続きません。どれだけスキルがあっても無理です。『パルユーフィット』はわたしたちが採用で最も重視していることです」

知識やタイプよりも、共感。企業の採用は、このつじつた情緒的なところに評価ポイントがあるようだ。以前と比べてどうかはわからないが、

では実際、学生のほうはどうだろうか？



こうした企業のニーズにどのように応えているのだろうか。

就職イコル受験？

最近の企業の採用ホームページには「求める人材」という項目がある。ある企業担当者はこの「求める人材」を出すことに戸惑いを示す。「求める人材」を「正解」だと思つて学生がいるから困るといふのだ。このつじつた学生は「求める人材」に合わせて自分の過去の経験を編集し、いかに自分が企業の求める人材に合致しているのかをプレゼンテーションするといふのだ。これは

なかなかすごいテクニクのように見えるが、そこには共感も意志もない。

「就職イコル受験」とにかく合格することに目が行っていて、この組織は、自分の持ち味を生かすことができる場所か？ といふことは、この次になっているといふのだ。企業は、新卒採用において、知識やスキルより「共感」を大切にしようとしているのだから、答えあわせのように「求める人材」のふりをする「受験生」ばかりでは困ってしまう。だから「求める人材」を公開するのをためらうのだ。これは、ごく最近の傾向らしいが、企業と学生のギャップを知るイベントとしておもしろい。

長期低迷経済の中、新卒採用は少数厳選採用になり、大雑把に言うて、「私立文系」の就職はとても厳しい。高卒の求人はいくらにしろ、例外なのが理科室、とりわけ機電系（機械・電気・電子系）の大学院卒。「よく勉強して鍛えられている」と別格扱いだが、実際どうだろうかよくわからない。しかし、「明らかに」就職とは選ばれるものと考えざるを得ない多くの学生と、「就職とは選ぶものだ」と言える機電系の大学院生に二分されているのが実情だ。「就職とは選ばれるもの」と思つて者が、就職を「受験」と思つてしまつるのは必然かもしれない。だから、最短距離で「求める人材」という「答え」を求めるのもかもしれないが、無理に入社してもすぐに辞めることになることはデータが示している。

先日、私もすごい光景を目にした。東京ビッグサイトで開催された、大手就職情報会社主催の就職イベント。ある大手有名テレビ局のブースは、早朝だといつのに長蛇の列になっていた。駅の近くまでスーツ姿の学生が並んでいる。ずっと続く列を見たら、場内整理をしていた主催社の社員がポツリと言った。「ここで列をつくっている学生の全員、このテレビ局に入社できないでしょうね。この会社が欲しい人材は機電系の院生で、機電系の院生はこんな合同就職セミナーには来ませんからね」

就職を受験と思い、求める人材になり

きろつと「ふり」をする。そんなことをしても見破られているし、さして意味がない。なぜ学生はそういう行動をとるのだろう？、それは求職難だけが原因なのだろうか？

よく言われることがある。大学までは仕事観を養う機会がバイト以外にない。親が一生涯懸命働いた拳句にリストラされているのを見て、バカらしくなっている。当面フリーターで食うことができ……。だから就職難なのに、働く自分をイメージできないし、仕事の喜びも苦しみもわからない。つまり、仕事へのリアリティが絶対的にないから、学生は、わかりやすい行動に

そろそろ就職も自律で

働く現場の言葉が通じていない。やさしく言えば、学生はただ知らなすぎ……。早く企業と接していないし、仕事について考えるきっかけもない。出会いが少ないから言葉も通じない。

もっと言えばいい、もっと早くから、単純にそう思う。

企業としてはインターンシップや職能像の言語化・明確化などいろいろなこととしているが、そこで働く自分をイメージできるものになっているとは言いがたい。

企業がリードし、押しつけるのではなく、学生がもっと勝手に自律的にできるだけ実際の企業で働く現場を見たり、聞いたりできること。いまの学生にとって最

も必要なことはそんなことだと思っ

言葉の通じないあつさんと出会い、なぜこんなにならばってしまつのかを考えるきっかけになるかもしれない。世界一、史上初の成果なんて、いまの企業には山とある。開発者に直に会えば、仕事で自分が挑戦してみたいことが見つかるかも知れない。また、もしかしたら、やりたいと思っ

ている仕事と自分の力のギャップを感じて悩む、なんていう幸運を味わうかもしれない。簡単なことだ。学生が自分で直接会う。聞く。そこで考えて選択する。それを支援する。これはなにかに似ている。そう。最前線の営業と同じだ。いまや最前線の営業くんが企業の価値を左右するならば、その担い手も、自律を前提とした企業との出

会の機会を与えられるべきだ。おそろしく、早いときから学生が企業と出会うことを支援することは、世の中にとっても大切なことに違いない。大量一括採用は、だれがつつたものなのかは知らない。「リクナビ」のような出会いだけでは、どう考え

てもつまらない。もっと、そろそろもっとオープンに楽しく仕事と出会い、学ぶ仕事

「求める人材に合わせて演出する学生ばかりも責められない」というのは、企業の採用ページの「求める人材」というボタンをクリックしてみると、「この企業もだいたい同じことが書かれている。」

- ・よくある「求める人材」に出てくるキーワード
- ・自律したプロフェッショナル
- ・夢と個性を大切に
- ・可能性を大切に
- ・挑戦というDNA
- ・企業と学生は同じ立場で……。

(2) たとはインターンシップ。仕事について短期的なインターンシップではわからない。結果責任がない仕事しかできないから、そんなに期待できない。ある総合商社採用担当者。もっと企業が求める人材像を明確に出す。仕事ごとのスキル標準を提示すればよいのではないかと指摘もある。伝える必要は感じなく伝えない。しかし、仕事観も乏しく経験もない学生にはわからない。しかも、採用担当者(という現実的な意見もある。ある都銀では、仕事そのものを大学の授業のような演出で理解させていく新卒採用サイトを開講した。ある大手化粧品会社では採用選考プロセスにおいてeラーニング的なくみで仕事を理解させ、セルフスクリーニングをしてもらおうとしている。)こうした企業のアプローチとは違うところから「仕事の学校」を考える必要があると思っ



しばはら よしあき

1960年生まれ。株式会社インターコミュニティ代表。主な業務は、企業の調査や企画、編集。株式会社ユー・ピー・ユー、BSR(Business for Social Responsibility)を経験し、98年「ひととひと、ひとと組織をつなぐ場=コミュニティを編集・デザインする」ような仕事をしたいと思い、会社をつくり代表に。



結婚をイメージ できない若者たち

20代、30代の若者にとって、最大の関心事の一つである「結婚」。彼らは結婚に対し、なにを求め、どんな理想を描いているのだろうか。各種アンケート調査などを通じ、現代人の結婚と恋愛を見つめてきた結婚情報サービス会社・株式会社オーエムエムジーの篠塚涼子さんに、最近の若者たちの結婚に対する意識やトレンドをうかがった。

篠塚 涼子 株式会社オーエムエムジー 渉外広報室広報グループ主任

しのづかりょうこ

東京都生まれ。学習院大学経済学部卒業。1990年、株式会社オーエムエムジー入社。以来、広報担当者として、結婚、恋愛、家族を中心とした意識調査を実施し、発表する仕事に携わっている。

「結婚しよつと」 言い出せないカップル

20代、30代の独身の方が結婚にないを求めているかというアンケートでは「安らぎ」という言葉が最初に出てきます。あとは「安定」とか、「愛する人」といふ言葉にしたいなど。とくに女性は、恋愛から結婚へという自然な気持ちがとても強い。愛している人といふ言葉にいられるから、という理由で結婚したい人がほとんどです。結婚相手と恋愛相手は別、という明確な区別はありません。また、「子どもが持てるから」「家族が持てるから」と答える人も多い。こうした傾向はいまも昔もほとんど変わっていないと思います。

結婚相手に求める条件も、90%以上が性格や相性の一致を第一に挙げています。女性の場合、経済的な安定という点も重要な要素ですが、とくに収入の高い相手を求めているわけではありません。男性に寄りかかるといふのではなく、自分もがんばるから相手にもがんばってほしいという人が多いですね。

男性も20代、30代は共働きを希望する人が大多数です。経済的に不安だからという理由からではなく、女性にも一本芯の通った生き方を求めています。ですから、目的を持たずにいつまでも決まらな仕事

に就かないような生き方をしている女性を、男性はすごく嫌います。結婚したら、自分にどつと寄りかかれそうに思うようです。経済的なものだけを求められて結婚するのはいやだ、という意識が強くあります。

晩婚化が社会問題となつていますが、結婚しないからといって、交際相手がいなくて恋人がいないうわけではないんです。これは30代後半の方でもそうですが、一度も異性とつきあったことがないという人は少ない。交際相手がいなくても結婚に踏み切れなかつた、という人がほとんどです。その理由として、二人の間で結婚話にまで至らないケースが多い。ずるずると交際していくぶんにはOKなのですが、結婚となるとためらうてしまふ。独身であれば自分だけの時間も持てるし、いやなときには会わなければいいわけですが、結婚となるとそうはいきません。全面的に相手を受け入れ、自分自身も相手にさらさなければならぬ。そういったところでの面倒さを引き受けることができなかつたり、そうした話し合いに至るまでのコミュニケーションが保てなかつたという人が多いんです。

お互いに相手が結婚のことを言い出すのを待っている、というケースもあります。自分からは言い出せない、なぜかというように相手に拒絶されるのが怖いからです。これ

は20代後半や30代の方に多いと思います
がとにかく傷つきたくない相手を傷つけ
るのがいやだし自分も傷つのがいや。だ
から言い出せない。近年「できちゃった結
婚」が増えているのは妊娠が結婚に踏み
切る最大のきっかけになっているからです。
そこでも結婚するタイミングをつかめな
いんですね。

これは人間関係が希薄になっているこ
とと関係しているのかもしれない。みな
さん友だちはたくさんいるのですがつき
あい方が表層的で悩みを友だちに相談
できない人が増えている。結婚に関して
も、どうして自分はモチないんだろうと
か相手がいないんだとどうしようなど
と、一人で悩んでいる人が多い。自分をさ
らけ出すのがいやなんです。そうした淡
泊な交友関係も、結婚をより難しくして
いる理由の一つだと思います。

本能だけでは 結婚できない時代

弊社では結婚に対する意識調査を始め
て10年になりますが、もしかしたら自分
は結婚できないのではないかとという不安
を抱えている人が年々増えています。しか
も、30代だけではなく20代にも多い。今年
20歳になった新成人に調査した結果でも、

女性の65%が結婚できないかもしれな
い」と答えています。

現在交際相手がないなどその理由は
いろいろあると思うのですが、結婚をイ
メージできない世の中になっているとい
うことも大きい。たとえば「昔前だと妻
は専業主婦で子どもは一人、家は4LD
K」といった典型的な家族像があり、そ
の「トスに乗るのが一番いいと考えられ
ていました。ところがいまは価値観も多様化
し、どれがいいのか一概には言えなくな
っている。選択肢が増えるのはいいことな
のですが、そうすると今度は選択しきれな
い人たちが出てきます。

私たちは他人との「コミュニケーションを
通じて、自分に合う人はどんな人なのか
どんな家庭を築きたいのか」といったこと
が見えてくるものですが、人間関係が希
薄だと友人の間でもそういったことを話
しあうことができず、具体的な結婚のイ
メージが描けない。つまり、学習しきれてい
ない人がいっぱいいるのだと思います。大
学受験だったり、その先の就職だったりす
ると、「ここまでがんばれば」となる、とい
うのがある程度わかると思うのですが、
結婚にはマニュアルのようなものがありま
せんから、いざ結婚を、となったとき、ハタ
と迷い、途方に暮れてしまうんです。

本来、本能で結婚できていたものが、社

会が複雑になってくると理性のほうが勝
り、好きだからというだけでは結婚でき
なくなっています。昔と比べ出会う機会
が少なくなっているわけではないと思うの
ですが、出会うのが難しいと考えている人
たちも多い。昔だったら周囲のしがらみの
ようなもので結婚するケースも多く、そ
れでもなんとなくうまくいっていたのが
いまはすべて自分で決めなくてはならな
い。教えられていないところで決めなけれ
ばならないのでこれはつらいと思います。
しかも、この世代だと両親が離婚してい
たり、仲が悪かったという場合も多い。結婚
の身近なモデルである家庭環境がそつだ
とますますどうしたらいいかわからなく
なるようです。

将来への不安が 結婚観に影響？

新成人に対する調査では、「なるべく早
く結婚したい」という人が以前に比べて増
えてきました。その理由として、「愛する人
といっしょにいたい」に次いで、「子どもなど
家族が欲しい」を挙げる人が多かった。女
性は少し前だと自己実現が先で、結婚は
そのあと。結婚や育児によつて自分の人生
を犠牲にしたくないという人が多かったの
ですが、いまの若い人にそういう意識は希

薄です。

「こうして早婚願望の背景には、将来に対
して希望が持てないという理由が挙げら
れると思います。新成人へのアンケートで
も、いまの生活に満足はしているのですが、
半数を超える人が「これからの世の中は悪
くなる」と答えていました。また、「親の世
代に比べ良い生活ができる」と考えている
人は、4分の1以下に過ぎませんでした。

いまの若い世代は、日本の将来を本当に
憂えています。もつすでに学歴だけでな
んとかなる時代ではなくなっていますが、
多分私たちの世代は自分が努力すれば
なんとかなると考えていたと思います。だ
けど、いまの若い人たちはそうじゃない。努
力したてどうにもならないと考えていま
す。だから、せめて自分の周りだけでも明
るくしたい。社会進出をしなくてもいいか
ら、家族や友人を大切に楽しく暮ら
したい。そう考える人が増えているので
す。それが早く結婚したい、子どもを持
たいという気持ちにつながっているのだと
思います。

この10年間の調査結果からは、結婚に対
する意識にそれほど大きな変化はなかつ
たように思うのですが、そういう意味で
はいまの10代後半、20代前半の人たちが
これからの結婚観を変えていく可能性を
秘めているのではないのでしょうか。(談)